24　「徒然草」兼好法師　─中世の随筆

17年度　早稲田大学

★　次の文章は、『徒然草』の第二百三十八段である。なお原文を改めた箇所、省略した部分がある。これを読んで、あとの問いに答えよ。

　御随身近友が自讃とて、七箇条書きとどめたることあり。みな馬芸、させることなきことどもなり。その例を思ひて、自讃のこと七つあり。

一、人あまた連れて花見ありきしに、最勝光院の辺にて、男の馬を走らしむるを見て、今一度馬をするものならば馬倒れて落つべし、しばし見給へとて立ちとまりたるに、また馬を馳す。とどむる所にて馬を引き倒して、乗る人、泥土の中にころび入る。その詞の誤らざることを人皆感ず。

一、まだ坊におはしまししころ、万里小路殿御所なりしに、堀川大納言祗候し給ひし御曹司へ、用ありて参りたりしに、論語の四五六の巻をくりひろげ給ひて、ただいま御所にて、悪紫之奪朱也といふ文を御覧ぜられたきことありて、御本を御覧ずれども御覧じ出だされぬなり、なほよく引き見よと仰せごとにて求むるなりと仰せらるるに、九の巻のそこそこのほどに侍ると申したりしかば、あなうれしとて、もてイまゐらせ給ひき。かほどのことは、どもも常のことなれど、昔の人は、いささかのことをもいみじく自讃したるなり。後鳥羽院の、Ａ御歌に袖とと一首のうちにあしかりなむやと、定家卿に尋ね仰せられたるに、「Ｂ秋の野の草の袂か花すすき穂に出でて招く袖と見ゆらん」（古今和歌集・秋上・在原）と侍れば何事か候ふべきと申されたることも、時にあたりて本歌を覚悟す、道の冥加なり高運なりなど、ことことしく記し置かれ侍るなり。

一、常在光院のき鐘の銘は、在兼卿の草なり。行房朝臣清書して、鋳型にさせんとせしに、奉行の入道、かの草を取り出でて見せ侍りしに、花外送夕　声聞百里といふ句あり。陽・唐の韻と見ゆるに、かと申したりしを、Ｃよくぞ見せ奉りける、おのれが高名なりとて、筆者のもとへ言ひやりたるに、誤り侍りけり、直さるべしと返事侍りき。数行も如何なるべきにか。もし数歩の心か。おぼつかなし。【Ｄ】

一、人あまたともなひて、のこと侍りしに、の常行堂のうち、龍華院と書ける古き額あり。佐理・行成の間疑ひありていまだ決せずと、堂僧  
　　Ｅ　　申し侍りしを、行成ならば裏書あるべし、佐理ならば裏書あるべからずと言ひたりしに、裏は塵積もり虫の巣にていぶせげなるを、よくきのごひて、おのおの見ロ侍りしに、行成、位署・名字・年号さだかに見え侍りしかば、人皆興に入る。

一、那蘭陀寺にて、道眼聖、談義せしに、八災といふことを忘れて、これや覚えハ給ふと言ひしを、皆覚えざりしに、局の内より、これこれにやと言ひ出だしたりければ、いみじく感じ侍りき。

一、顕助僧正に伴ひて、加持香水を見侍りしに、いまだ果てぬほどに、僧正帰り出で侍りしに、まで僧都見えず。法師どもを帰して求めさするに、同じさまなる大衆多くて、え求めあはずと言ひて、いと久しくて出でたりしを、あなわびし、それ求めてニおはせよと言はれしに、帰り入りて、やがて具して出でぬ。

一、二月十五日、月あかき夜、うち更けて千本の寺に詣でて、後より入りて、ひとり顔深く隠して聴聞し侍りしに、優なる女の、姿にほひ人よりことなるが、わけ入りて膝にゐかかれば、にほひなども移るばかりなれば、便あしと思ひてすりのきたるに、なほゐ寄りて同じ様なれば、立ちぬ。その後、ある御所さまの古き女房の、そぞろごと言はれしついでに、Ｆ無下に色なき人におはしけりと、見おとし奉ることなんありし、情なしと恨みホ奉る人なんあるとのたまひ出だしたるに、　　Ｇ　　と申してやみぬ。このこと、後に聞き侍りしは、かの聴聞の夜、御局の内より、人の御覧じ知りて、さぶらふ女房を作り立てて出だし給ひて、便よくは言葉など懸けんものぞ、その有様参りて申せ、興あらんとて、はかり給ひけるとぞ。

（注）　１「当代」…後醍醐天皇。なお「坊」は、「東宮坊」のこと。

　　　　２「百里誤りか」…銘文は多く四字句から成り、偶数句で押韻する。「里」は陽・唐の韻字ではないため、押韻の間違いを指摘した。

　　　　３「数行」…「行」は、「ツラナル」の意では陽・唐の韻だが、「メグル」の意では異なる韻（庚・耕・清の韻）となる。

　　　　４「三塔巡礼」…比叡山の東塔・西塔・横川を巡礼すること。

　　　　５「所化」…弟子の僧。

　　　　６「陣の外」…内裏の門外。なおここに記述される修法は、内裏で行われたと考えられる。

問１　傍線部Ａ・Ｃ・Ｆの意味として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つ選べ。

Ａ　イ　著名な和歌に袖と袂を交えて一首に仕立てた例があったはずだが

　　ロ　あなたの和歌に袖と袂とを一首に詠み込んだ作があったはずだが

　　ハ　『古今集』中の袖と袂とを一首に詠んだ歌を覚えているだろうか

　　ニ　私の和歌に袖と袂とを一首に詠み込むのはよくないことだろうか

Ｃ　イ　どうか十二分に見分していただきたい、これはあなたの責任である

　　ロ　よくぞあなたはお認めになった、あなたの素晴らしい名誉である

　　ハ　都合よくあなたにお見せをしたものだ、これは私の手柄である

　　ニ　うまい具合に私に指摘してくださった、私は実に幸運である

Ｆ　イ　ひどく無粋な御方でいらっしゃったと、軽蔑申し上げたことがあった

　　ロ　全く目立たぬ人でいらっしゃったから、お見付けできないことがあった

　　ハ　やけに顔色の悪い人でいらっしゃって、お見捨て申し上げたことがあった

　　ニ　たいそう無欲な方でいらっしゃったために、ついついふざけたことがあった

問２　波傍線部イ～ホの敬語のうち、兼好を対象とする敬意を表すものが二つある。適切なものを選び、記せ。

［　　　］・［　　　］

問３　傍線部Ｂの和歌について述べた説明のうち、適切でないものを次の中から一つ選べ。

イ　「袂」と「袖」が意味の近い語であることは、とくに意識されず詠み込まれている。

ロ　秋の野の植物を擬人化することによって、見立て表現のおもしろさが狙われている。

ハ　「袂」と「袖」とが、一首の主文脈とはまったく無関係に縁語関係を形作っている。

ニ　歌末の助動詞「らん」は、すすきの穂がひとを招く袖に見える理由を推量している。

ホ　「穂に出でて」には、すすきの穂が出る意と、あからさまにの意が掛けられている。

問４　『徒然草』の伝本の中には、第三箇条の末尾【Ｄ】の位置に後人の書き入れかと思われる「数行なほ不審。数は四五なり。鐘四五歩いくばくならざるなり。ただ遠く聞こゆる心なり」という注記を加えるものがある。この注記は何を指摘していると考えられるか。最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　「数行」の韻字が、このように改訂してもなお問題が残ることを、具体的に指摘している。

ロ　「数行」の字義に対する疑問を敷衍し、その改訂でも不適切であることを指摘している。

ハ　「数行」の「数」の意味を明らかにすることで、兼好の見識の卓抜さを指摘している。

ニ　「数行」の改訂が、十分な吟味を経ず拙速に行われたことへの不審を指摘している。

ホ　「数行」の表現は、本来この位置に来るべき内容に相応しいことを指摘している。

問５　空欄　　Ｅ　　に入るのに最も適切な連用修飾語を、問題文の第一箇条から第三箇条までの範囲に見出し、それをそのまま解答欄に書き抜け。ただしその語は、五字以上の一語とする。

［　　　　　　　　　　］

問６　空欄　　Ｇ　　には、左の五つの語を組み合わせた語句が入る。活用語は正しく活用させ、すべての語を適切につなげて、解答欄に記せ。

心得【動詞】　　こそ【係助詞】　　さらに【副詞】

ず【助動詞】　　侍り【補助動詞】

［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

問７　問題文の内容と合致するものを次の中から一つ選べ。

イ　兼好は、近友以来の馬芸の極意を伝承しており、落馬を予見することができた。

ロ　兼好は、漢籍のみならず歌の知識にも通暁しており、堀川大納言の信任を得た。

ハ　兼好は、詩人としての才に恵まれ、銘文等の添削を依頼されること度々だった。

ニ　兼好は、迷子の人をすぐさま探し出せるほど、内裏の中の様子を知悉していた。

ホ　兼好は、色恋の手管にたけており、美しい女性からの誘いには積極的に応じた。

問８　兼好に関する説明として正しいものを次の中から一つ選べ。

イ　座の文芸である連歌を好み、『新撰菟玖波集』の編集を補助した。

ロ　吉田神社の神職の家に生まれ、後鳥羽院にあつく信任された。

ハ　『万葉集』を深く研究し、『古来風体抄』で初めて全歌に訓を施した。

ニ　足利尊氏の執事・に仕え、『太平記』をきびしく批判した。

ホ　定家の子孫である二条家門下の歌人として、高く評価された。

【解答】

問１　Ａ＝ニ　Ｃ＝ハ　Ｆ＝イ

問２　ニ・ホ

問３　イ

問４　ロ

問５　ことことしく

問６　さらにこそ心得侍らね

問７　ニ

問８　ホ

【現代語訳】

　御随身近友の自讃といって、七箇条書きとめたことがある。（それは）全て馬芸（に関することで）、たいしたことのない諸事である。その先例を思って、（私も）自讃のことが七つある。

一、（私が）大勢の人と連れ立って花を見て歩き回ったときに、最勝光院の辺り

　で、男が馬を走らせるのを見て、もう一度馬を走らせるものであるならば馬

　が倒れて（男は）落ちるだろう、しばらくご覧なさいと言って立ち止まって

　いると、（男は）また馬を走らせる。（馬を）止める所で馬を引き倒して、乗

　っている男は、ぬかるみの中にころがり込む。その（私の）言葉が間違いで

　ないことを人々はみな感心する。

一、後醍醐天皇がまだ皇太子でいらっしゃったころ、万里小路殿が（東宮）御

　所であったが、堀川大納言が出仕なさっていた（御所の）御控えの間へ、（私

　が）用事があって参上したときに、『論語』の四・五・六の巻を繰り広げなさ

　って、ただ今東宮で、悪紫之奪朱也（紫の朱を奪ふことを悪む）という本文

　をご覧になりたいことがあって、御本を御覧になるけれどもお見つけになれ

　ないのである、さらによく捜し出せとのご命令で捜しているのだとおっしゃ

　るので、九の巻のどこそこの辺りにございますと申したところ、ああ嬉しい

　と言って、（それを）お差し上げになった。これくらいのことは、子どもたち

　でも（できる）普通のことであるが、昔の人は、ちょっとしたことをもたい

　そう自讃したのである。後鳥羽院が、御歌について袖と袂とを一首に（詠み

　込むのは）悪いだろうかと、（藤原）定家卿に質問をおっしゃったときに、（定

　家卿が）「秋の野の草の袂か花すすき穂に出でて招く袖と見ゆらん（秋の野の

　草《は美しい着物を着ているようだが、そ》の袂なのか、すすきの穂は。《そ

　れで》人目に付くように私を招く袖のように見えているのだろう。）」とござ

　いますので何の（さしつかえる）ことがございましょう、いやありませんと

　申し上げなさったことも、（定家卿は）時に応じて本歌を覚えている、（それ

　は、）歌道の神のご加護である好運であるなど、仰々しく書き留めなさるので

　ございます。

一、常在光院の釣鐘の銘文は、（菅原）在兼卿の草稿である。（藤原）行房朝臣

　が清書して、鋳型に模写させようとしたときに、（命令によって）執行してい

　た入道が、その草稿を取り出して（私に）見せましたのに、花外送夕　声聞

　百里（花の外に夕べを送れば　声百里に聞こゆ）という句がある。（他の句は）

　陽・唐の韻と思われるが、百里は（陽・唐の韻でないので）間違いだろうか

　と（私が）申し上げたところ、都合よく（あなたに）見せ申しあげたものだ、

　（これは）私の手柄であると言って、筆者（在兼卿）のもとへ知らせてやっ

　たところ、間違えました、（百里を）数行とお直しくださいと返事がありまし

　た。（が、）数行もどのようなものだろうか。あるいは数歩の意味か。はっき

　りしない。【数行はやはり不審だ。（数行の）数は四、五（ほどのわずかな数

　のこと）だ。鐘四、五歩はどれほどもない距離である。（この詩句は）ただ（鐘

　の音が）遠くまで聞こえるという意味である。】

一、（私が）大勢の人を連れて、比叡山の東塔・西塔・横川を巡礼することがあ

　りましたときに、横川の常行堂の内に、龍華院と書いてある古い額がある。（額

　の筆者は藤原）佐理・（藤原）行成の内（どちらか）疑問があってまだ決着し

　ないと、堂守の僧が大げさに申し上げましたので、（私が）行成であるならば

　裏書があるはずだ、佐理であるならば裏書があるはずがないと言ったところ、

　（額の）裏は塵が積もり虫の巣で汚らしいのを、よく払って拭き取って、そ

　れぞれで見ましたところ、行成の、位署・名字・年号が確かに見えましたの

　で、人々はみなおもしろがる。

一、那蘭陀寺で、道眼上人が、説法をしたときに、八災ということを忘れて、

　あなた方は覚えていらっしゃるかと言ったが、弟子の僧たちは、みな覚えて

　いなかったので、別席の内から、（私が）これこれであろうかと言い出したと

　ころ、（人々は）たいそう感心しました。

一、顕助僧正に供をして、加持香水の修法を見ましたときに、（儀式が）まだ終

　わらないうちに、僧正が我々の席に戻ってきましたが、内裏の門外まで（僧

　正の供をしていた）僧都の姿が見えない。法師たちを引き返させて捜させた

　が、同じ姿の僧徒が多くいて、捜し出せないと言って、たいそう経ってから

　出てきたので、ああ困ったことよ、そなたが捜していらっしゃいと言われた

　ので、（私は）引き返して、すぐ（僧都を）連れて出てきた。

一、二月十五日、月の明るい夜、すっかり更けてから千本釈迦堂に参詣して、

　後方から入って、一人で顔を深く隠して説法を聴聞しておりましたところ、

　上品な女で、姿や気配が人と違って特にすぐれている女が、割り込んで（私

　の）膝にもたれかかるので、匂いなども（私に）移るほどであるので、具合

　が悪いと思っていざって身を引いたところ、更に座ったまま寄ってきて（さ

　っきと）同じ様子であるので、席を立ってしまった。その後、ある御所方に

　仕える古参の女房が、とりとめのないことを話しなさった折に、ひどく無粋

　な御方でいらっしゃったと、軽蔑申し上げることがあった、情趣がないと恨

　み申し上げる人がいると話し出しなさったので、全然納得がいきませんと申

　し上げてそのままになってしまった。このことについて、後で聞きましたこ

　とは、あの聴聞の夜、ご別席の内から、ある人が（私を）お見つけになって、

　お側に控えている女房をめかし立ててお出しになって、もしうまくいったら

　言葉などをかけるがよい、（そして）その様子を帰参して報告申せ、おもしろ

　かろうと言って、たくらみなさったということである。